

豊中ロータリークラブ教育フォーラム

「学校教育における道徳を考える」

豊中ロータリークラブ青少年奉仕委員会教育問題検討委員 畑田耕一

目次	頁
はじめに	2
第1章 授業としての道徳教育	
1.1 道徳の授業を要として行う道徳教育	2
1.2 道徳教育の場で観念と現実の世界を如何に往復するか	3
1.3 道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて道徳教育を行うとは？	4
1.4 道徳教育とカリキュラム・マネジメント	6
1.5 教科「道徳」を道徳教育の要としてしっかりと根付かせよう	7
1.6 双方向授業・アクティブ・ラーニングと道徳教育	8
1.7 学校教育の多様性	9
第2章 根本原理と道徳教育	
2.1 化学の授業を学生の道徳的能力の向上に役立てる	11
2.2 道徳とは何か？ 道徳の本質とは？	12
2.3 アインシュタインが娘のリーゼルに送った手紙「この世界で万能の力は愛である」	14
第3章 道徳教育と社会	
3.1 大人の世界は子供たちの模範になろう—大人が道徳を忘れてはいけない—	15
3.2 大人は、そしてロータリアンは子供達や若者に道徳の本質を語ろう	16
3.3 情報の科学・技術とメディア・リテラシー	17
3.4 シェアリング・エコノミーと道徳	18
3.5 社長などの組織の長はその理念をインターネットで公表しよう	19
3.6 ロータリーの四つのテストは道徳の本質を伝えている	20
3.7 情動的な道徳教育が必要	23
終わりに	23

はじめに

本年度の豊中ロータリークラブ（RC）恒例の教育フォーラム、平成 29 年 1 月 21 日に「学校教育における道徳を考える」を主題としてホテルアイボリーで行われました。米田豊中 RC 青少年奉仕委員長の開会の辞に続き、国際ロータリー 2660 地区ガバナー松本氏の「最近の日本では、電通の残業問題、豊洲市場の移転問題など職業倫理、道徳に欠ける企業や公的機関の施策が散見され、子どもにとって、見本となるべき大人の社会が、道徳を子どもに教える環境ではない憂慮すべき事態にあるように思われる。そんな中で、様々な立場や年齢の人たちが教育について語り合うこのフォーラムは、当地区の財産の一つである。本日の話し合いが、我々大人が、司会の畑田氏がいつも述べておられる、道徳的能力の根本の力である想像力を働かせて如何にしてより良き社会を構築できるかを、未来を担う子供たちに示し、あるいは、考えてもらう機会となることを期待している」という力強いお言葉で会は始まりました。

第 1 章 授業としての道徳教育

1.1 道徳の授業を要として行う道徳教育

学習指導要領第 1 章総則の第 1 教育課程編成の一般方針の 2 には、「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである」と述べられています。「算数の時間にどうやって道徳のことを教えればいいのか」などと悩んでいる小学校の先生が居られるとも聞きます。これについては、いろいろな意見が出ましたが最終的には、「算数の目標は日常生活に起こるいろいろなことについて見通しをもち、筋道を立てて考え表現する能力を育てることで、これは、道徳的な思考力・判断力の育成に大いに役立つものである。算数の先生はこれまで通り授業を一生懸命に行うだけでよいのだ」というベテランの先生の発言で議論に終止符が打たれました。

しかしながら、この学習指導要領の文章は「算数の授業で体育を教えなさい」と言われたに等しい誤解を招く可能性があります。算数の先生がそのような誤った理解をしたら、「算数の授業で一体どうやって道徳を！」と悩むのも無理はありません。

皆さんの道徳と算数の関連についてのいろいろな討論の中での、参加者の一人である哲学の専門家による「道徳と幾何学」についてのお話をここで引用しておきます。「2500 年前のギリシャの哲学者にプラトンという人がいます。彼は、道徳とは何か、善悪とは何

か、あるいは人はいかに生きるべきかを哲学のテーマにしていたのですが、彼の開いたアカデメイアという学校の門には、『幾何学を学ばざる者この門をくぐるべからず』と書かれていたのです。幾何学を学ばない人は道徳を学ぶことができないという訳です。2500年前の時点で、道徳あるいは倫理を学ぶためには、まず幾何学を勉強しなければならないという認識があったということになります。一見、道徳と全く関係がないような幾何学をなぜ勉強しなければならないのか？ それは、幾何学を勉強するのは、ある1つの秩序を学ぶということであり、同時に、根本原理（ギリシャ語ではアルケ）あるいは本質を学ぶことにもなるからです。秩序や原理を学ぶための1つの道具として幾何学を捉えたのです。道徳の本質・根本原理を如何に秩序立てて実行に移すか、社会で行為するか、の勉強に幾何学を活用したという訳です。原理や本質というのは多少分かりにくい言葉ですが、多くの図形の中から1つの共通性あるいは普遍性、例えば、全てが三角形であるというような要素を見出すことを、原理・本質を見出すというのです。

道徳というのは、抽象的な観念の世界だけに関わるものではなくて、現実の世界とどのように関わっていくのかという、観念と現実との間を如何に往復するかが重要視される分野なのです。人に対してどう振る舞うかを頭で考え、それを秩序にしたがって実行するのが道徳です。教育の現場で道徳を教える場合には、理屈を教えるとともに、人と接する機会を提供するのも重要なのです」

1.2 道徳教育の場で観念と現実の世界を如何に往復するか

道徳の本質・根本原理を如何に秩序立てて実行に移すかという具体的な状況に生徒を置くような機会を提供する授業の一つが、中学生の職場体験学習です。職場体験学習はここ豊中でも随分以前から行われています。中学2年生が三日間にわたって、企業や子供園の現場で職場の方々と一緒に仕事をさせていただくわけです。先生も、他の学年の授業の都合で僅かな時間にはなりますが、職場体験学習を行っている生徒のそれぞれの学習現場を訪問し、視察しておられます。生徒だけではなく、先生方も学校の外の社会との接点でさまざまなことを学ぶことができるのです。職場体験学習でどれだけ効果が上がるかは、学校と企業・子供園などが、この学習の原理と目的をどれだけ深く理解し実行しているにかかっていることは言うまでもありません。

技術・家庭科、特別活動、ホームルームなどは、観念の世界と現実の世界の間の往復に活用可能な授業ではないかと思います。例えば、技術・家庭科は、その関連する現実の世

界を家庭と捉えて実行すれば、素晴らしい効果を上げられる授業になると思います。問題は、授業の内容に道德に関わるどのような題材を選んで実行するかです。まさに先生たちの腕の見せ所です。何物にもとらわれない自由な発想による活動を期待しております。

勿論、ヨーロッパの道德に関わる哲学の歴史のなかには、たとえばカントのように、理屈あるいは観念だけで道德を考えようという人もいました。彼は、「うそをついてはいけないという道德の原理がある。それは、どんな現実の状況、いかなる場合においても、守らねばならない。うそをつかないことが道德の原理なのだ」と主張しました。でも、現実生きるわれわれにとっては、ときには、うそをついた方が人のためになる、あるいは、うそをつくことによって人を救えるというような状況もあると思います。しかし、カントにとっては、このような具体的な現実の状況とは関係なしに、うそつくことは原理に反する悪だとして考えられないわけです。私自身は、そうではなくて、現実の状況と照らし合わせながら道德を考えないと、学者はともかく、一般市民には、道德がある種の机上の空論のように受け取られかねないのではないかと思います。道德について現実の状況と照らし合わせながら教育をする臨床道德学という学問分野は確立されていないようですが、このような学問領域は臨床倫理学の分野に含まれているのでしょうか。道德の問題を、学校教育の観点から見つめるとともに、「道德教育の市民社会への展開」というような観点からも考える必要があると、今思っています。

1.3 道德の時間を要として学校の教育活動全体を通じて道德教育を行うとは？

理科でも、想像力の開発・育成が重要であるという点では算数と同じです。理科の授業では、社会的な観点から公害の問題を扱うこともあろうかと思しますので、算数とは少し違う面からの道德的能力の開発に繋ぐことができます。理科の授業には道德の本質の理解を含めて道德の授業に繋ぐ題材がいくつもあるのです。まさに、理科の授業で道德の授業ができるのです。

国語の授業は、道德を考える上で不可欠です。国語の授業は、道德的能力を支えるコミュニケーションの力を育成します。コミュニケーションの力無しには、物事の判断はできず、意見も言えず、文章も発表できません。国語の授業は、道德的能力の開発に不可欠な存在です。

しかし、国語と道德は同じではありません。国語の授業であれば、ある文章を読んで、読者としての心情を書く、あるいは発表するといういわゆる感想文を作る学習でもよいの

ですが、このやり方は道徳の授業には通用しません。道徳の授業としての学習であれば、何故そういう心情が得られたのか、どうしてそう思うのかが明確に書かれていなければならないのです。先生も一方的に自分の価値観を押しつけてはいけません。生徒と一緒にあって議論をして、授業の内容を深化させねばなりません。簡単に言えば、何を学ぶかではなくて、何のために学ぶかなのです。こういうことを自分一人で行うのはかなり難しいので、みんなで議論をして考えを深化させるのです。どうしてそう思ったの？ なぜそう思ったの？ どうしてそうなったの？ 児童や生徒の頭に、「？」が浮かぶような質問をして、いろいろなことを考えられる土壌をクラスに作っていくのが先生にとって大事な仕事です。少し言い方を変えれば、哲学する道徳あるいは考える道徳とも言えるのかもしれませんが。

算数と理科は、言うまでもなく、まさに論理的思考能力を養成する科目です。「Why?」、「何故？」なしには、数学や理科の授業はできないのです。したがって、算数と理科の授業を適切な方法で一所懸命やれば、当然、道徳的能力はつくわけです。

社会の授業は、道徳そのものに直接関わっていると言えます。社会の授業を突き詰めれば、その根本にあるのは道徳です。社会の科目を一所懸命学習すれば、道徳的能力を身につけることができると思います。暗記物ではない社会の授業には、「社会的何故？」は絶対必要なのです。

小学校や中学校で、生徒自身はその授業の内容と道徳との強いつながりを意識するのも「社会」の授業のようです。社会の授業には、日本や世界の歴史から身分制度やいじめの問題まで、いろいろな人の営みの話が出てくるので、道徳と社会の授業の連関・繋がりをごく自然に意識することができ、両者の学習に役立つと考えられます。道徳の授業で学習する根本原理と論理の実社会の出来事とのつながりが、社会の授業を受けてよく分かるようになり、二つの授業の学習効果が相乗的に高まるということかもしれません。

また、芸術と音楽ですが、これらはまさに美を追求する科目です。学習指導要領の小学校図画工作科の部には、「創造することの楽しさを感じるとともに、思考・判断し表現するなどの造形的な創造活動の基礎的な能力を育てること、生活の中での造形や美術の働きや、美術文化に関心をもって、生涯にわたり主体的に関わっていく態度をはぐくむことなどを重視する」と書かれています。また、小学校の音楽の部には、「音楽活動の楽しさの体験を通して音楽を愛好する心情と感性を豊かにし、生涯にわたって音楽に親しんでいく態度の育成を重視する。音楽の豊かさや美しさを感じ取るとともに、表現及び鑑賞の基礎的な能力を育てることを重視する」と記されています。これらの分野で養われる豊かな情操は、

道徳的能力の基礎につながることは間違いありません。

したがって、文部科学省のいう「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである」の下線の部分は、それぞれの科目の授業を先生方が真面目に行うだけで達成できるのです。カリキュラムの変更などの特別な措置は全く不要です。ただ、どの科目を教える時も、想像力の養成なしには、その目的は達成できないことを先生方は忘れないで欲しいと思います。

1.4 道徳教育とカリキュラム・マネージメント

しかしながら、道徳以外の科目で如何に素晴らしい授業が行われて道徳的能力の根源の力である想像力が養われても、これが道徳の授業と何の関わりもなく行われていたのでは、道徳の授業の効果は上がりません。道徳の授業でこれについて考えたあとに、社会科でこの話をするのが良いのではないとか、算数でこれをやってから、道徳の授業でこれを学ばせた方がいいのではないかと言うようなことが、非常に大事です。児童・生徒が道徳的な考えを深められるためには、「どのような授業内容をどのように配置するか」に十分な配慮が必要なのです。所謂カリキュラム・マネージメントに十分な配慮をしつつ、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行う総合的な道徳教育が求められているのです。教科がすべてばらばらに授業をするのではなくて、道徳の授業内容を深めるために、どういう形で道徳を要にして各教科の授業内容を配置していくかについて、今、学校現場で、それぞれの学校に応じて取り組まれています。

ただ、数学といえども、丸暗記だけで切り抜けようとする生徒がいないわけではありません。数学の授業が道徳の授業の根源の力である想像力の養成につながるためには、それなりの雰囲気作りが要ります。その先生の教え方への配慮・態度、また、生徒の授業を受けるときの心づかい・心の持ち方などが非常に大事です。これは、1.6 節および 1.7 節で述べる双方向授業の雰囲気を授業の中にどれだけ持ち込めるかに関わることで、まさに先生の腕の見せ所です。たとえ、数学の授業で 1+1 はどうして 3 でないのですかというような質問が出て、皆が笑っているような時でも、この質問に適切に対処できる能力を数学の先生はお持ちいただきたいというのは過度な要求でしょうか。

ここで、参考までに「新しい学習指導要領等が目指す姿」と題する思考力についての中央教育審議会の初等中等教育分科会（第 100 回）の配布資料を再掲させていただきます。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryu/attach/1364316.htm

この資料には、各科目における思考力について、次のように書かれています。「思考力は、国語や外国語において様々な資料から必要な情報を整理して自分の考えをまとめる過程や、社会科において社会的な事象から見いだした課題や多様な考え方を多面的・多角的に考察して自分の考えをまとめていく過程、数学において事象を数学的に捉えて問題を設定し、解決の構想を立てて考察していく過程、理科において自然の事象を目的意識を持って観察・実験し、科学的に探究する過程、音楽や美術において自分の意図や発想に基づき表現を工夫していく過程、保健体育において自己や仲間の運動課題や健康課題に気づき、その解決策を考える過程、技術・家庭科において生活の課題を見だし、最適な解決策を追究する過程、道徳において人間としての生き方についての考えを深める過程などを通じて育まれていく（中学校の教科構成を基に例示）。これらの思考力を基盤に判断力や表現力等も同様に、各教科等の中でその内容に応じ育まれる」この資料の文章は、道徳を含むどの科目の授業も、設定された問題を深く考えることにより、思考力、ひいては判断力、表現力を育成するものであることを明言しております。

道徳の授業で育成・助長すべき道徳的能力の根源の力は想像力なのです。そして、授業で育成されるべき根本の力もまた想像力です。したがって、上記のベテランの先生が言われたように「算数の先生はこれまで通り授業を一生懸命に行うだけでよいのだ」ということになるのです（1.1 参照）。上に述べたカリキュラム・マネジメントが適切に機能していれば、算数だけではなく、全ての授業で育成された想像力が、やがてはその人の道徳的能力の開発・展開に大きく役立つのです。

1.5 教科「道徳」を道徳教育の要としてしっかりと根付かせよう

道徳の授業は、長い間半ば中ぶらりんのような形で行われてきました。道徳の授業は、おなががすいてきて授業に集中しにくい傾向にある4時限目に置いたり、国語など他の科目の授業と置き換えたり、というようなことが行われていたようです。文部科学省の「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである」の下線の部分は、道徳の授業を1つの科目として時間設定された独立した授業として行うことを示すものです。その発足は小学校が2018年、中学校が2019年の予定です。現在、施行に向けていろいろな議論・準備が行われているところです。これまでの道徳の授業で出来なかったことも含めて、長い間培ってきた道徳の授業についての問題点や反省点をしっかりと踏まえて、これからの未来にあるべき道徳教育を議論して、受験云々というよ

うなことは無関係な、これからの日本にとって大きく深い意味のある教科を作り上げて欲しいと思います。

ただ、文科省が主張していることは、今に始まったことではありません。筆者が小学校で、修身という名前の道徳の授業を受けていた時、その成績は修身以外の科目の平均点を参考にしてつけられていたように記憶しております。これはまさに、今、道徳の授業について文科省が言っていることと同じことの実行に当たると思います。

ついでながら、この戦前の修身という科目が、いま議論している道徳に当たります。修身では、うそをついてはいけないとか、人を殺してはいけないというようなことが教えられていました。人間のあるべき姿、あるいは真理を教えようとしていたのだと思います。また、これは算数や数学に関することですが、1 足す 1 は 2 ということ、あるいは三角形の一辺は他の二辺の和よりも短いということ、これも真理だと思います。変えることができません。こういうことを教える場合は、道徳の根本を正しく理解した上で、教える内容を道徳と結びつけて、話が出来なければなりません。「算数や数学の中に道徳を取り入れるのではなくて、道徳の根本をしっかり把握した上で、自分の教える科目に道徳を結びつけて授業をするということですか」とは、豊中 RC 澤木先生の言です。

道徳の授業と関係が深いと思われる授業に総合的な学習があります。この授業の目標は、「横断的・総合的な学習や探究的な学習を通して、自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て、自己の生き方を考えることができるようにする」と定められています。

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/sougou.htm 道徳の学習には横断的な学習が必要になることが多いと思われます。道徳の授業と総合的な学習の授業の間には、ある種の協調的関連があつてしかるべきと考えますが如何でしょうか。

1.6 双方向授業・アクティブ・ラーニングと道徳教育

今、小学校、中学校では、双方向授業とアクティブ・ラーニングがかなり実践されています。ごく簡単に、あるいは単純な言い方をすれば、双方向授業とは、先生が一方向的にしゃべるのではなくて、生徒も授業の内容についてどんどん質問し意見を言う事で、生徒も先生も、授業内容についての理解を深める授業です。アクティブ・ラーニングは、授業、特に双方向授業での、生徒の学習の仕方・学習態度を示す語で、文科省は、これを「課題

の発見・解決に向けた主体的・協働的な学び」と表現しております。

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/siryo/attach/1364316.htm

アクティブ・ラーニングをともなう双方向授業では、いろいろな意見、自由な意見が出せる雰囲気づくりが大切で、それが達成されていて、且つ論理的思考力と判断力ならびに表現力が養われていれば、道徳の授業のように、一つの問題・命題についてもいろいろな考え方のあり得る科目では、大きな成果を挙げることが予想されます。先生も児童・生徒も、アクティブに授業に参加するようなやり方をすることによって、文字や本で学ぶものではなく、その場で実感できるような教育・学習ができて、成果が上がると思うのです。ここは、担当教員の腕の見せ所ともいえます。アクティブ・ラーニングは、勿論、あらゆる科目の授業に必要な生徒の学習態度であり、論理的思考力と判断力ならびに表現力をともなうアクティブ・ラーニングが高校の授業にもいきわたれば、日本の学校教育、さらには大学・大学院での教育も大きくレベルアップすることは間違いありません。

このようにして、学校・大学・大学院などで身に付いた双方向授業の教育・学習態度は、その後の生涯教育の場で活用され磨き上げられ、新しく得られた知識や技能と関連付けられ体系化されながら身に付き、ひいては生涯にわたり活用できるような物事の深い理解や方法の熟達に至るのです。「自分がこうだ」と思ってしまうと、他の人が何を言っても、いや、それ違うと言いたくなるのがよくあります。それを抑えて、相手の意見をよく聞く、あるいは徹底的に意見交換をすることで、思いやりというか、心のゆとりが育ち、真の意味の協調性が生まれるように思います。相手の意見に十分な意見交換もせずに合意することは協調ではありません。

1.7 学校教育の多様性

ここで、双方向授業にとって大事なことを二つ述べて置きます。一つ目は、アクティブ・ラーニングに支えられた双方向授業の大きな特徴、あるいはその目的は、教育・学習方法の個性化と多様化だということです。これを忘れてはなりません。双方向授業という教育・学習方法の工夫・改善が、その本来の目的を見失い、特定の学習や指導の「型」に拘泥する事態を招かないことを強く願っております。二つ目は、多くの異なる意見が出た時に、喧嘩腰の議論になるのを避けて、異なる意見の共役による素晴らしい結論を導き出す努力を一所懸命して欲しいということです。この異なる意見の共役は、1+1 が 2 以上になる協力、というような言葉で置き換えられることもあるかもしれません。ここでも担当教員の

力量、生徒自身の力量、そしてまた教員・生徒のクラスとしての力量が試されます。少し言い方を変えれば、10人が一緒になって仕事をする時に、10人ともほとんど同じ特性の人たちであれば、その総力は高々10にしかならないが、それぞれが異なる性格の能力を持っていれば、そして足の引っ張り合いのようなことをしなければ、10以上の力を発揮する可能性があるということです。

道徳を正規の授業にするということは、新しい授業を作るということです。当然のことながら、これまでなかったような新しい立場、新しい授業のやり方が求められます。「学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである」という記述は、道徳の授業のこれまでの授業にはなかった新しい立場を示しています。2.1節に述べる、化学の世界でのいろいろな事象を人の営みと捉えて授業を行い、生徒・学生の道徳的能力の向上に役立てるとするのは、新しい授業のやり方の一つです。

人を殺してはいけないというのは真理だという意見に反対する人はあまりないと思いますが、それでは、戦争のときはどうでしょうか？戦争では人をたくさん殺した人が英雄になったりします。これをどう考えますか？また、日本には死刑制度があって、国家がときどき人を殺しています。これは道徳と反しませんか？また、「100人殺しても死刑にはなりません、無期刑です」と書いてある法律は、道徳的な法律なのでしょうか？少し話の方向を変えれば、人をほめるのはすばらしいことですか？道徳的なことですか？とこういうふうに言って、みんなで議論をすればいいと思うのです。このような答えが出ないかもしれないような問題を設定して議論をする授業のやり方は、道徳の授業の進むべき一つの方向ではないでしょうか。このような議論を道徳教育道徳論と名付けても良いかと思いません（こうしておけば道徳教育算数論のような使い方が出来ます）。そして、そのような討論の仕方が他の科目の授業にも波及していけば、面白い結果が生まれるかもしれません。

もう一言付け加えれば、「うそも方便」という言葉があります。ここはうそを言った方が良いのだろうか、本当のことを言う方がいいのだろうか、はたまた何も言わずに黙っているのが良いのだろうか、と迷うことが時々あります。道徳的能力の根本である想像力を駆使しても決断し難いことがあります。道徳教育道徳論の絶好の話題の一つです。

なお、最近、新聞でよく報道される「いじめ」も、学校における道徳に深く関わる問題の一つです。これをいきなり道徳の授業で扱うのは若干問題があるような気はしますが、少なくとも、全教師が参加する会合で、いじめを主題とする徹底的な討論がなされるべきではないでしょうか。問題が起こった時の特別委員会ではなくて、一般論としての討論で

す。たとえ道德の専門教員が決まっているような場合でも、全教員が参加する会合を行うことが大事です。「私は道德が専門でないから関係ありません。あなた達でやって下さい」というような人が一人でもいたら、この問題は解決しないように思います。先生も神様ではありません。生身の人間として先生間で徹底的に議論したうえで、「あなた達だったらどうする？」と児童・生徒に問えば、彼らも真剣に考え、応えてくれるように思うのです。このような道德の授業が行われれば、今までとは一味違う展開が望めるかもしれません。

「いじめ」は、私の子どもの時から、それは戦中から戦後にかけてですが、しょっちゅうありました。その時分は、子供同士で何とか解決していたように思います。今は、それがみんな先生のところに持ち込まれる。先生も大変だなと思います。他人をいじめるのは良いことだと思っている生徒はまずいないでしょうから、一般論で解決できる問題ではありません。難しいことだとは思いますが、親と子供が一緒になって相談し、先生の支援も得て、解決を図ってみては如何でしょうか。

第2章 根本原理と道德教育

2.1 化学の授業を学生の道德的能力の向上に役立てる

ここで、大学教養課程での化学の授業を学生の道德的能力の向上に役立てようとしている試みを一つ紹介します。以下はその教授のお話です。

「教養部の300人から400人の学生相手の授業で、生活のなかの化学を教えていました。この授業で私が立った原点は、化学であれ、政治経済であれ、変わらないのは人の営みなのだという視点です。人の営みとしての学問分野として化学を見てみますと、多くの題材が浮かんできます。非常にわかりやすい例を1つ挙げますと、DNAの発見です。DNAの発見には、皆さんご存知のように、ワトソンとクリックと、それからウィルキンスという方がおられます。ウィルキンスの行為が果たして正しかったのかどうかというのが、後世問題になるのです。ロザリンド・フランクリンという若い女性が、実は、DNAのエックス線構造解析を、實際上やっていたのですが、その業績をウィルキンスが盗んだのではないかという問題です。アン・セイヤーという人がこの問題の暴露記事のような小説を書き、それに対してワトソンが反論するというような経緯があるのです。DNAの発見は、現在の分子生物学の幕開けなのですが、そこで繰り広げられたドラマは、まさに科学者としての人の生き方そのものなのです。そういう視点でDNAを語ってみますと、DNAという物

質ではなしに、そこには血の通った人間の営みとしての DNA が浮かんでくるということです。数学も含めてあらゆる教科で、私は、人の営みとしてのあり方という視点に立てば、道徳とまでは言わないにしても、あるいは倫理とは言わないにしても、あるいは人の生き方とは言わないにしても、そういうことの総括的なものが語れるのではないかと私は思っております。環境教育にしても、たとえばフロンという物質を取りあげてみれば、それにまつわるドラマには大変な深みがあります。また、高分子化学の分野では、シュタウディンガーが高分子の概念をどのようにして見つけたかとか、あるいはカロザースがナイロンというすばらしい化学繊維を発見しながら、なぜ自殺しなければいけなかったのかといった、人の生き方として語るができるのです。さらに言えば、数学におけるゼロの発見です。ゼロは、数学の根本命題です。ゼロというのは、シューニャターという仏教でいう「空」に通じる概念なのです。ゼロとは一体何なのか。これは仏教の根幹的な概念である「空」とは何かということとつながっています。この問題は哲学にもつながり、さらに人の生き方を普遍的に考えることにも関わります。

一言でいえば、あらゆる教科で、そこに関わった人たちのことを、人の営みとして、すなわち歴史的な事例をもってして語れば、それを通して道徳的な思考を身に付けてもらえるように思うのです。というような意味で、私はあらゆる教科について、歴史性を考えつつ、それに人の営みという観点を付け加えて物を見るならば、文科省の『学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものである』という提言を満たすことができると思うのです。

このような授業は化学に限らず他の科目の授業でも同様に行えることは間違いありませんが、教える側に相当な労力が必要です。小・中・高等学校の先生方に出来ないことはありませんが、相当な負担になります。大学の先生に出前授業をお願いするのも一法かと思えます。

2.2 道徳とは何か？ 道徳の本質とは？

道徳についていろいろなお話しをしてまいりましたが、道徳とは何か、すなわち道徳の本質についての議論はまだしていません。学習指導要領「生きる力」第3章「道徳」には、道徳の授業についての詳しい記述があります。小学校の部

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/syo/dou.htm と中学校の部

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/dou.htm とがありますが、両

者にあまり大きな違いはありません。中学校の道徳の授業の目標は、「学校の教育活動全体を通じて、道徳的な心情、判断力、実践意欲と態度などの道徳性を養うこととする。道徳の時間においては、以上の道徳教育の目標に基づき、各教科、総合的な学習の時間及び特別活動における道徳教育と密接な関連を図りながら、計画的、発展的な指導によってこれを補充、深化、統合し、道徳的価値及びそれに基づいた人間としての生き方についての自覚を深め、道徳的実践力を育成するものとする」と記されています。それに続けて、道徳教育の内容について「望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け調和のある生活をする」というような項目が多く記されておりますが、道徳の本質、道徳とは何かについては何も書かれていません。

ここまで、道徳の本質や根本原理というような語を説明なしに使ってきましたが、「道徳とは何か」と聞かれて、分かり易い言葉で答えるのは意外に難しいのです。筆者の答えは次の通りです。

「道徳的に自己の周りの社会とお付き合いをする力、すなわち道徳的能力の基本は、人間が他の人々や動植物を含む自然環境に対して、どのような態度を取るべきかを適切に判断する能力です。そのような判断を下すには、人以外の動植物やものとのコミュニケーションが出来なければなりません。人以外の動植物やものは人間の言葉をしゃべらないので、それらとのコミュニケーションは想像力に頼るしかありません。さらに、文化の伝承には、過去に学び、未来を予測することが必要です。そのためには、既に亡くなった人やこれから生まれてくる人との想像力を駆使したコミュニケーションが要求されます。

子供たちの大半が文化財のような古い伝統的木造住宅に住み、自分のお爺さんやお婆さんが作った家という思いを持って住む家を慈しむような環境では、子供たちは、ごく自然に想像力を養い、道徳的能力を高めることが出来ました。今では、そのような環境は皆無に近くなりました。子供たちの豊かな想像力を、道徳的能力の開発、創造力の発揮に繋げる教育的配慮、措置、授業が必要になっていきます。道徳の授業を行う総合的な道徳教育システム構築の必要性が叫ばれている所以です。筆者もその支援の一つのつもりで、小学生の文化財建造物の見学会と『古い日本住宅に見られる生活の工夫』や『道徳』を語る出前授業に努めています。 <http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/dohtoku-sohzoh.pdf>」

道徳の本質をこのように考えていただければ、道徳の授業で想像力の養成が如何に大事かということもお分かりいただけると思います。

なお、上記の学習指導要領には、小学校、中学校の部ともに、「道徳教育を進めるに当た

っては、学校や学級内の人間関係や環境を整えるとともに、学校の道徳教育の指導内容が生徒の日常生活に生かされるようにする必要がある。また、道徳の時間の授業を公開したり、授業の実施や地域教材の開発や活用などに、保護者や地域の人々の積極的な参加や協力を得たりするなど、家庭や地域社会との共通理解を深め、相互の連携を図るよう配慮する必要がある」という記載があり、道徳の授業の生徒の日常生活ならびに生徒の家庭を含めた地域社会への展開の必要性が述べられています。

ついでながら、「児童の道徳性については、常にその実態を把握して指導に生かすよう努める必要がある。ただし、道徳の時間に関して数値などによる評価は行わないものとする」として、成績評価についても言及していることを付記して置きます。

2.3 アインシュタインが娘のリーゼルに送った手紙「この世界で万能の力は愛である」

ここで、もう一つ興味深いお話しをしておきます。それはアインシュタインが娘のリーゼルに送った手紙に書かれていたという「この世界で万能の力は愛である」という言葉です。以下にその1節を紹介します。

There is an extremely powerful force that, so far, science has not found a formal explanation to. It is a force that includes and governs all others, and is even behind any phenomenon operating in the universe and has not yet been identified by us.

This universal force is LOVE.

When scientists looked for a unified theory of the universe they forgot the most powerful unseen force.

Love is Light, that enlightens those who give and receive it.

Love is gravity, because it makes some people feel attracted to others.

Love is power, because it multiplies the best we have, and allows humanity not to be extinguished in their blind selfishness. Love unfolds and reveals.

For love we live and die.

Love is God and God is Love.

(<https://wearelightbeings.wordpress.com/2015/04/15/a-letter-from-albert-einstein-to-his-daughter-about-the-universal-force-which-is-love/>参照)

アインシュタインは相対性理論が世に受け入れられるのにかなりの年月を要したのと同様に、「Universal force is LOVE」が皆に理解されるのに相当な年月が必要と考えて、娘

に書き送ったようです。この文章を読んでいると、道徳の根源の力も愛である、という言葉が自然に浮かんできます。

第3章 道徳教育と社会

3.1 大人の世界は子供たちの模範になろう—大人が道徳を忘れてはいけない—

学校教育でいくら素晴らしい道徳の授業を行っても、本来児童・生徒の模範たるべき大人の世界が道徳を忘れていては何もなりません。大手の広告会社電通で最近起こった若い社員の異常な長時間勤務が原因の過労死自殺は、単なる労働基準法違反というような問題を超えて、企業における道徳の本質を踏みにじる大きな問題です。電通だけを悪者にして済む話ではありません。日本の全ての会社を含む日本社会全体が真剣に考えるべき大きな問題です。

医者の世界でも過労死自殺がよくあるそうです。特に研修医に多いということです。研修医は専門医としての資格を取るための仕事が必要で、いわゆる超過勤務時間は長くなくても、病院での勤務時間は長くなってしまいます。しかも外科系統では、手術があれば、いつでも対応しなければならないので、体を壊したりして、自殺に至るようなことが起こるわけです。労働基準法 36 条による書面による協定(36 協定)が結ばれていても、現実には過労死が起こっています。過労自殺をした研修医の家の方の話では、いつも夜遅くに疲れて帰ってきて、それでも、翌朝早く起きて出勤する。そのうちに、もう病院に行くのが嫌だ、と言い出していたという記録があります。まさに過労死です。

大病院の元院長であった参加者の話では、彼自身も院長になるまでは、家に帰るのは週のうち 3 回ぐらいで、後は殆ど病院にいたということです。ある時、仕事で強いストレスがかかって胃潰瘍になって出血し、胃カメラで出血している血管を処置してもらいました。その翌日、どうしても出席しなければならない会議があつて、医者の止めるのを振り切って出席したとのこと。こういう時には「胃をお酒でアルコール消毒すると効くのです」とは、難しい討論の中での笑いの一コマとしてお聞きください。でも、大変考えさせられる笑いの一コマだったと思います。

筆者がカウンセラーをした留学生の一人が、今、日本の大学で博士研究員として研究しているのですが、帰宅は毎日夜の 11 時だといいます。大学の研究室ではそういうことが当たり前になっているのかもしれませんが。研究活動はいくら本人の自由だとはいえ、研究

室での活動時間については担当教授らが適切な指導をするべきだと考えます。

大学の教員は、本来、高度な教育を受けていて、倫理観の高い人たちであると世間から期待されているように思います。企業のトップの人たちもそのはずです。ところが、実はそうではないとしか思えないような事件が時々起こります。最近、大阪大学で起こった、年度内に使いきれなかったその年度の研究費を業者に実物の納入無しに支払っておいて、翌年度以降に使おうとしたという事件がその一例です。金額があまり大きくなければ、予算の来るのが遅くて使いきれなかったお金を一時業者に預けて、国の予算が無駄になるのを防ぐ工夫をしたともいえないことはありませんが、その金額が数千万円をはるかに超えると聞くと、どこかに道德の本質に反する問題が潜んでいると考えざるを得ません。国立の教育研究機関の中で起こったことです。いくら道德教育をしても殺人犯がなくなるのとは、訳が違います。単なる大学教員の道德・倫理の問題として処理せずに、大阪大学だけではなく、全ての大学を取り囲むいろいろな制度・システムの問題として、徹底的な検討が必要なのではないでしょうか。

3.2 大人は、そしてロータリアンは子供達や若者に道德の本質を語ろう

ここで、お花の先生のロータリアンから、生け花の道を通して道德を語っていただきます。彼曰く、「お花を生ける時に大事なことは、今手にしているこの花はどういうふうにして欲しいと言っているのだろうかを、想像力を働かせて探ってやることなのです。花に対して失礼をしてはいけません。花たちは、みんな主役になりたいのかもしれませんが、悪いが今回はあなたではなくて、こっちの花の方が主役ですよ、ということをお花に納得してもらうことも必要なのです」と。お花の先生は、お花を生ける時は、花と話をしながら生けなさい、と言っておられるのです。まさに道德の本質を語っておられるのです。

彼はさらにこう続けました。「今の若い人たちに、お花を習って免状を取らないかというのと、先生、それが何になるのですか？何に使えるのですか？と聞くのです。それで、私はこう答えます。稽古事というのはそんな目の前にあるような結果を求めてやるものではない。明日覚えられる、あさって覚えられるというものとは違うのだ。ずっと向こうの遠いところに見える針の穴のような明かりを求めて、そこへ向かって長い時間をかけて努力していくのが稽古事なのだ、それが人生なのだ、私は言うのです。若い人たちには、20年先、30年先に、私が死んでしまった後にでも、ああ、あの時先生が言っていたのはこういうことだったのか、と思い出してもらえらるようなことを教えていきたいと思っています」

と。これは、まさに、お花の稽古を通して道徳あるいは道徳教育の神髄を語っておられるのだと思います。

今、お花の先生の言われた、聞いた時は意味がよく分からなくても、後になってからそのことの本質が見えてくるというお話を聞いて、思い出したことがあります。それは、私が小学校5年生の時の出来事です。海軍の兵隊さんが軍艦の中でやる体操を小学生向けにアレンジした海軍体操というのがありました。それを、体育の先生が全校の児童達に熱心に指導し、大変上手になったというので、周辺の学校の先生方を招いて公開授業が行われたのです。それは、戦争の終わる約二か月前、梅雨の最中の雨の降る校庭で行われました。そして、参観・検閲に来ていた陸軍の中尉さんが、授業の終わりに「君達は非常に上手な体操を見せてくれた。私は大変心強く思った。しかし、体操も大事だが、勉強も一所懸命にやってくれ。戦争が終わった後の世界の平和のために」と講評されたのです。体操よりもいわゆる勉強の方が好きだった私は、兵隊さんなかなかいいことを言ってくれたと嬉しかったのですが、校長先生をはじめとするその場におられた先生方には、かなり意外な言葉だったようです。後で我が家に用事で来られた校長先生が「けしからんことを言う兵隊さんだと」と怒って母に言い、母は母で「先生、そんなことを言っても、勉強せんと体操ばかりやってたら国つぶれまっせ」と、かなり強く言い合いをしていた夏の夕暮れのことを今もはっきりと覚えています。この兵隊さんの言葉は、日本が戦争に負けた後、将来この子供たちがどのようにして未来を切り開いていくのかに思いをいたし、戦争のない平和な世界を作ることに貢献してくれることを願っての、必死の発言だったのだと、最近、思うようになりました。「世界の平和のために勉強する」、これは戦争中に他のどの授業で聞いた言葉よりも道徳の本質に迫るものだったと、いま思っています。

3.3 情報の科学・技術とメディア・リテラシー

3.1 節で述べたような大学や企業でのモラルの低下の話は、大なり小なり以前からあったので、最近急に起こり出したわけではありません。新聞、雑誌、ラジオ、TV などの媒体、いわゆるマスメディアを通じて行われる大衆への大規模な情報伝達、マスコミュニケーションの発達によって、昔はあまり表には出なかった情報が、内部告発なども加わって、急に社会に広がるようになったのだと思います。このような状況が悪いことだとは思いませんが、監視社会の形成につながっては困ります。情報科学と技術の進歩が社会的公害を招くようなことにならないうちに、情報科学と技術それ自身によって解決を図って欲しい

と思うのです。今後、誤った道に踏みこむことが無いために、一般市民の適切な支援・協力が不可欠です。

大したことでもないのに、それがネットで拡散して、非常に悪いことをしているかの如くに広がるというような状況になることを防がねばなりません。中学生や高校生の大半がスマホを持っているのが現状です。ネット情報を鵜呑みにせずに冷静な判断をする、人の意見に左右されるのではなく自分の判断で考えて行動することが大切です。有名人が偽の画像を作って、これが事実ですと言ったら、それが事実になってしまうというような馬鹿げたことを起こしてはなりません。メディア・リテラシー ([media literacy https://ja.wikipedia.org/wiki/メディア・リテラシー](https://ja.wikipedia.org/wiki/メディア・リテラシー)) という言葉があります。これは、情報メディアから必要な情報を引き出し、その真偽を確かめ、活用する能力、端的に言えば、情報を評価・識別する能力のことです。カナダ、イギリス、オーストラリアでは、学校教育のカリキュラムに取り入れられているようです。

メディアの言うこと、書いてあることを、そのまま信用するのではなく、その正否、当否を充分検討し、信頼するに足るものだけを取り入れるというのは、そんなに簡単なことではありません。しかし、メディア・リテラシーの機能していない社会は、いずれ混乱状態に陥ることは目に見えています。少なくとも高校生には、道德教育の一部としてメディア・リテラシーをきっちりと学ばせることが、喫緊の課題と考えます。

3.4 シェアリング・エコノミーと道德

情報の信頼性の話が出たところで、「信頼」が深く関わる分野であるシェアリング・エコノミーに話を移します。シェアリング・エコノミー (sharing economy) とは、個人が所有する遊休資産 (乗り物、住居、家具、服などで、スキルのような無形のものも含まれる) の貸出しを仲介するサービスを言います。貸主は遊休資産の活用による収入を、借主は資産を所有することなく利用できるというメリットが得られます。近年、欲しいものを購入するのではなく、必要なときに借りればよいという考えを持つ人が増えており、そのような人々と、所有物を提供したい人々を引き合わせるインターネット上のサービスとして注目を集めています。

先日、マイあさラジオという NHK の番組で、2017 年度の IT 業界のキーワードは、「友愛、信頼、共感」だという話しが出ておりました。哲学の服部先生の言葉を借りるならば、「観念的」なキーワードです。その背景にあるのは、人と人とが共感し合う、ということ

です。具体例がシェアリング・エコノミーです。上に述べたように、私の空いている部屋を皆さん方にお貸ししましょう、そこにビールも置いておきましょう、お土産も置いておきましょうというようなことを、インターネット上で拡散させるわけです。野菜を取ってお金を置いていくという野菜の直売所でのようなことが、インターネット上で行われているのです。

このシステムには、勿論、見知らぬ人同士がモノを貸し借りするというリスクが付きまといまいます。このような問題に対応するのがレビュー評価制度です。個人と個人の信頼関係の構築がこのサービスが成り立つための重要な要素なので、多くのシェアリング・エコノミーサービスには、信頼性を高めるためのレビュー評価制度が導入されています。過去の利用者によるレビューとともに、ホストからゲストへのレビューも行われているようです。Facebook などの既存の SNS (social networking service) との連携が通常行われています。システムの信頼性向上のために写真入り身分証明書提示や本人確認を行うための ID 認証が行われることもあります。3.3 節に「監視社会の到来を恐れる」という意味のことを書きましたが、このシステムではレビューという評価制度で、そのような問題が上手に回避されていると思います。「道徳」のなせる業でしょうか。

(<http://sharing-economy-lab.jp/share-business-service>
http://www.lij.jp/news/research_memo/20160705_3.pdf 参照)

3.5 社長などの組織の長はその理念をインターネットで公表しよう

さて、ロータリークラブの会員、ロータリアンは日々の仕事を通して、生きる力の根本である自らの道徳的能力を高め、それを社会に反映させることを責務と考えて努力しています。ロータリアンは日常の職業活動を通して、自分の職場の従業員、取引先の人達やその関係者、ひいては地域社会の人達の模範となり、生きる力の根源である道徳的能力を向上させることに努めているのです。このような仕事の仕方を、ロータリーでは、職業奉仕と呼んでいます。職業奉仕とは、職業を通して社会のニーズをほぼ完全な形で満たせるよう努力を重ねることです。これにより、自己の職業の品位と道徳水準を高め、社会から尊重・尊敬される存在にすることが出来るのです。そして、ロータリーの奉仕活動の究極の目標は世界の平和です。

人と人との信頼という問題は、若い人たちが将来の仕事の場、働き場を求める時にも関わってくる大事な問題です。私たちの経験では、中小企業の社長さん方とお話をすると、

この人達は利潤追求を重要視されるのは当然のことですが、一方で社会奉仕ということを真剣に考えておられます。ほとんどの方がそうです。これは、企業や学校・大学など市民社会の中の組織体のあるべき姿を、社長さんがよく認識しておられるということです。道徳の根本原理の深い認識ともいえます。ロータリーの言葉でいえば、職業奉仕に徹しておられるのです。

ある中小企業の会社で、新任の社長さんが、社員が幸せに生きていくということを社是に掲げてインターネットに載せたのです。そうしたら、そのことが社員の方々全員に浸透して、その会社は非常に生き生きとした素晴らしい会社になりました。インターネットを通じて情報発信をすると、その企業の社是・理念がその会社の社員のみならず社外の人たちにも容易に認識されます。社外の人たちが、その会社の社長の考えている社是・理念を認識しているということは、社内の人たちすなわち社員への無言の励ましとなり、会社の社会奉仕活動を含めた業績向上に繋がるのです。たとえば、今回、問題を引き起こした電通の社長さんはどういう理念を発信しておられたのか、それがどういう結果を生んでいたのか、一度専門の先生に研究してもらいたいなと思っています。

組織体がどういう道を歩むかは、トップの姿勢で決まります。松本ガバナーの姿勢が、今日のこの教育フォーラムを支えているのです。それはガバナーの思想、哲学の問題です。先ほど生け花の先生が、お花のお稽古について言われたことも同じです。重ねて言いますが、こういう事は出来るだけインターネットで発信していただきたい。そして、今日ここにおられる高校生の諸君は、将来、就職先を選択するときには、初任給、業種、仕事の内容などととともに、是非、社長の哲学・理念に目を通していただきたいと思う次第です。

3.6 ロータリーの四つのテストは道徳の本質を伝えている

ロータリーの哲学を端的に表現し、職業奉仕の理念の実行に役立つとともに、ロータリアンでない一般市民にも道徳の本質を伝え、あるいは思い起こさせるものとして、四つのテストがあります。このテストは、シカゴのロータリアンであり、後にロータリー創始 50 周年（1954-55）に、国際ロータリー会長を務めたハーバート J. テイラーが、1932 年の世界大恐慌のときに考えたものです。彼は、シカゴの Jewel Tea 株式会社の代表役員でしたが、1932 年に Club Aluminum 製品株式会社を破産の危機から救って欲しいと要請されて同社に移り、この会社を再生させるために、他の同業者にはない「社員の人格と信頼性と奉仕の心」の育成を決心したのです。その育成の指針として会社の全従業員が使える

ような倫理上の尺度として作られたのが四つのテストです。

四つのテスト	The Four-Way Test
言行はこれに照らしてから行うべし	Of the things we think, say or do :
1. 真実かどうか	1. Is it the TRUTH?
2. みんなに公平か	2. Is it FAIR to all concerned?
3. 好意と友情を深めるか	3. Will it build GOOD WILL and BETTER FRIENDSHIP?
4. みんなのためになるかどうか	4. Will it be BENEFICIAL to all concerned?

四つのテストは簡単な言葉ですが、クラブ・アルミニウム社が苦境期を切り抜けるための指針となりました。会社の広告も、四つのテストに照らし合わせて検討し、最上、極上などの表現を避け、製品の実際の姿を手短に述べるかたちになりました。ライバル会社への非難、悪口は、広告や販売推進パンフレットから姿を消しました。従業員は四つのテストの暗記を求められ、やがて、四つのテストは、仕事のあらゆる面での指針となりました。その結果、信頼と好意の雰囲気が取引先や顧客や従業員の中に生まれ、会社の業績が次第に好転し、5年後の1937年までに40万ドルの負債は利子とともに完済され、その後の15年間で、会社は株主に対して100万ドル以上の配当を行い、その資産は200万ドル近くになりました。これらは、道徳の本質・根本原理が全社員により実行に移された結果とも言えると思います。

このように、四つのテストは、初めはロータリーの外で作られたものですが、RI 理事会は、1943年に正式に四つのテストを採択し、その著作権は1954年ハーバート・テイラーがRI会長の時に、彼からRIに寄贈されました。

ここで、文章の意味を少し詳しく考えてみましょう。 **Is it the TRUTH?** の和訳文中の「真実」は「嘘偽りのない本当のこと」というように単純に考えるのではなく、もう少し深く考えて、「物事の原理・原則、根本原理」と理解するのがよいと思われます。

Is it FAIR to all concerned? の **FAIR** は人々に対して、その場の状況に応じて私的感情をあまりまじえずに、偏り無く対処することを意味するので、この文章の邦訳は「みんなに公平か」よりは、田中毅氏（田中毅、二つの奉仕理念 2007年）の言われる「みんなに公正か」の方が原文の意味を適切に伝えていると思います。真実は、時として信念の

要素を含むことがあるので、それが相手を困らせることが無いような配慮も要するという
ことを、言外に、にじませているとも言えます。

Will it build GOOD WILL and BETTER FRIENDSHIP? 「好意と友情を深めるか」
は、自分以外の人や動植物やものと付き合うときの、ごく自然で基本的な対処の仕方です
が、ここでは、ある程度の私的な感情がまざるのはやむを得ません。大事なことは、それ
が他を排除するものであってはならないということです。

道徳的な基準は、自分が何かを行うときの他への態度の規範ですが、それは当然、相手
もそれに反応しやすく、何かを行いやすいための配慮を含んでいなければなりません。こ
れが **Will it be BENEFICIAL to all concerned?** 「みんなのためになるかどうか」です。

「好意と友情を深めるか」の判断で、私的な感情が強くなり過ぎないように戒めていると
いう解釈もできます。

四つのテストは、当初、商取引に関連して作られたものであり、**all concerned** は取引
先のことなのですが、四つのテストの邦訳は **all concerned** を **all** と同じに捉えています。
しかし、これは間違いではありません。ロータリーの会員には、その職業が商取引には直
接関係しない人達がかかなりいることや、四つのテストが商取引以外の場でも使われる可能
性が高いことを考慮すれば、ロータリアンの日常生活のすべての言行に適用できる現行の
邦訳「みんな」の方が適切と考えられます。

ある中学校の3年生100余名に、四つのテストの話をしたところ、普段の道徳の授業と
は様子の違う話に、ある種の驚きと戸惑いを示しながらも、熱心に聴いてくれました。そ
の時の生徒の感想・意見を読むと、20%近い生徒が「四つのテストは善悪の基準として納
得のいくものである」という意味の反応を示していました。「道徳とは何かという話は、考
え方の根本的なことで、とても参考になりました。特に、四つのテストは善悪を判断する
基準として、とても分かりやすく、日常生活にあてはめて考えることができます。『何の
ためにこれをやるのか』という答えを出すことができると思います」という意見は、この
テストが中学生にも訴える力を持っていることを示しています。

四つのテストの基本は「真実かどうか」ですが、それが自己の信念のかたくなで偏狭な
押し付けにならないように、短い言葉を組み合わせ、互いに相補わせることによって、実
に上手に、道徳的規範という、考え様によっては堅苦しいことが、やさしく、穏やかに述
べられています。四つのテストのそれぞれを個別のものとは考えずに、全体を一つに融合

したものと捉えて、自分の言行を判断することが重要です。

(<http://culture-h.jp/hatadake-katsuyo/E3.html> 参照)

3.7 情動的道德教育が必要

情報科学と技術の恩恵で、世の中は随分便利になりました。しかし、そのために、生徒や学生が無駄な時間を費やしているということも起こっています。彼等も、こんなもの作ってくれなかったら、もう一寸勉強できたのに、と思っているかもしれません。この発言を聞いた高校生の一人が、「その通りです。スマホがその最たる物です」と言ってくれました。インターネット社会の脅威であるスパイ行為、産業スパイや国家スパイなどはもっと深刻な問題です。このような問題にどのように対処するかという情動的道德教育は、幼稚園児、児童、生徒とその保護者らに対して早急に行わなければならない時代になっていると思います。

「ツイッターやフェイスブックなどはあまり使わないようにしましょう。一寸したことでも、めごとをひきおこしたり、他の人を不快にしたり、またそれによって自分も不快になったりしますよ」というようなことを、母親から何回も言われて育ってきた子供はかなりいるようです。このような問題に関しては、父親は、割合、楽観的なことが多いようです。でも、母親の全てがツイッターやフェイスブックを使うことに反対なわけではありません。別に使ってもいいでしょうと、思っている人もいます。わけです。「だから、使用を禁止することはできないけれども、使い方を変えるとか、どんなふうにするのが自分にとって一番いいのかを考える取り組みをしてみてもどうか、と思っています」とは、ある高校生の弁です。筆者も強くそう思います。3人姉妹の末っ子で、幼いころからゲームなどで電子機器に触れるようになり、母親から1日10分にしなさい！ときつく言われるほどであった子供も、高校生になった今は、遊びのようなことで電子機器によりかかる時間は、あまり長くない方が良く考えるようになったと推測されます。高校での情報科学・技術に関わる道德教育が、かなり効果を発揮しているという感じもしております。

終わりに

会の終りに、豊中 RC 澤木会員から下記の様な挨拶と纏めの言葉が述べられました。

「人間社会を生きていく上で、道德の問題というのは絶対に避けて通れない、大事な問題であります。戦前から戦後まもなくにかけての道德教育は、家庭、地域、そして学校が互いに暗黙のうちに協力して行って参りました。ところが、その後の、社会情勢の変化の

なかで、家庭の中での道徳教育が次第に疎かになってきました。これは、日本の社会が、女性も働く時代になって、そのうえ核家族化で分散してしまうということで、家庭での孫の道徳教育を小さいときから担ってくれていた祖父母も役割を果たせなくなり、遂に道徳教育は学校でやるしかなくなってしまいました。その間に、いじめだ、自殺だと、いろいろな問題が起こるようになって、最近、にわかに学校現場における道徳教育の問題がクローズアップされるようになりました。そういうことで、今日は『学校教育における道徳を考える』を主題とする教育フォーラムを開催する運びとなったわけです。ご出席の皆さんからたくさんのいろいろなお話を伺いまして、私自身も、相当、勉強させていただきました。

学校教育における道徳を考えるというテーマに関しては、皆さんのお手持ちの資料、学習指導要領、第1章総則第1、教育課程編成の一般方針の2に書いてありますように、『学校における道徳教育は、道徳の時間を要として学校の教育活動全体を通じて行うものであり、道徳の時間はもとより、各教科、外国語活動、総合的な学習の時間及び特別活動のそれぞれの特質に応じて、児童の発達の段階を考慮して、適切な指導を行わなければならない』と定められています。今日のフォーラムで最初に取り上げられた、学校教育のそれぞれの教科を通して道徳を考える、というところでは、数学の教科からは、どういうふうにして道徳に入っていくかというお話から始まったのですが、結論は、先生方は自分の専門とする科目を徹底して教える、それが道徳教育にも通ずる、但し、教科がすべてばらばらに授業をするのではなくて、学校として、どういう形で、道徳を要にして、道徳の授業内容を深めるために、各教科の授業内容を配置していくかが大事である、ということであったと思います。

それから、2番目の企業の職業倫理、道徳のところでも議論された組織・企業の長の考え方あるいは会社の社是などが、その組織の活動状況・業績に大きく影響すること、またそれらが組織の構成員を含めて一般に公開されていることが大事だという指摘は、私にとって大変ヒントになりました。

そして、畑田委員長が最後に提案されました、ロータリーの四つのテストは、道徳の本質を示すもので、ロータリーだけではなくて、社会全般に公開して広めていきたいというお話、私も全く同感です。『真実かどうか、みんなに公平か、好意と友情を深めるか、みんなのためになるかどうか』という内容をよく考えて、それがきっちりと身につけば、不正行為や不良行為は自ずと減っていくのではないかと、そういう気がいたします。

これらが今日の議論を通して、私が考え、感じたことです。長時間に渡りまして、若い

人、年いった方、皆さんの貴重なご意見をいただきました。本当にありがとうございました。これをもって終わりたいと思います」

最後に、司会者畑田の「今日は、皆さんに3時間余り話し合っただき、また知り合いにもなっていただいたわけです。今日の話はこれで終わりにするのではなくて、今後、皆様方がいろいろなところで、いろいろな方とお会いになり、お付き合いされる中で、今日の道德フォーラムの内容を伝え、そして、さらなる展開を図っていただければ有難いと思います」の一言で会の幕が閉じられました。

終わりに、本稿を草するに当たり種々ご意見・ご教示をいただいた高知工科大学名誉教授細川隆弘様、四天王寺学園教諭尾野光男様、兵庫県立豊岡高等学校教諭渋谷亘様、畑田家住宅活用保存会幹事矢野富美子様、豊中ロータリークラブ戸部義人様、澤木政光様に心より御礼を申し上げます。有難うございました。

本フォーラムの出席者は下記の通りです。(順不同)

野川 誠	西宮市立西宮高校教諭
北野 悠	西宮市立西宮高校1年生
柏本幸歩	西宮市立西宮高校1年生
関子博香	西宮市立西宮高校1年生
立石佳子	西宮市立西宮高校1年生
田坂恵美子	大阪大学基礎工学研究科事務補佐員(留学生担当)
吉岡賢一	豊中市教育委員会学校教育課教務係(道德所管)係長
卓 妍秀	大阪大学理学研究科国際交流センター
毛利晴彦	ダイキン工業株式会社担当課長
矢野富美子	畑田家住宅活用保存会幹事
畑田耕一	大阪大学名誉教授、畑田家住宅活用保存会事務局長
服部敬弘	同志社大学文学部助教
尾野光男	四天王寺学園教諭
松本進也	国際ロータリー2660地区ガバナー
細川隆弘	高知工科大学名誉教授
久保田拓鑑	株式会社コンセプト代表取締役

佐藤尚弘 大阪大学理学研究科教授

Li Yan 豊中 RC 奨学生 (中国)、大阪大学理学研究科博士後期課程 3 年

Lai Yen-ting 豊中 RC 奨学生 (台湾) 大阪大学基礎工学研究科博士後期課程 2 年

豊中 RC 会員

畑田耕一 岩本洋子、木村正治 北村公一 米田真 小寺潤一 榊田定子 松尾宗好

宮田幹二 村司辰朗 大塚穎三 澤木政光 豊島之雄 戸部義人 矢口正登